2023.1.27　上毛新聞

点描ぐんま経済

日銀支店長　見聞録

■109■

海なし県の海水魚養殖

環境再現技術に驚き

私の出身は茨城県の内陸に位置する牛久市だ。海までは遠く、子供の頃に海に行ったのは年に1、2回。夏休みの家族旅行が千葉県富津市の民宿で、このほかに学校の遠足などで大洗に行く程度だった。海水浴では大きな波が怖くて、泣きながら逃げ回った思い出がある。海は遠くて、キラキラ輝いているけど、ちょっと怖い存在だった。

50歳を過ぎた今でも海への畏敬の念は抱き続けている。そんな折、「海なし県」の群馬で海水魚の養殖をしている会社があることを知った。しかも一つではなく複数だ。どんな技術で実現しているのか知りたくて訪問見学を申し込んだ。

海水魚の養殖なので海水が必要だが、群馬県まで海水を運んだらコストがかかり過ぎる。このため通常の水に塩分を加えた人工海水が使われており、蒸発して失われた分の水を新たに加えるだけ。人工海水は交換せずに魚を飼うので、餌の食べ残しやふんなどの汚れの処理が必要になる。

いくつかの浄化過程があるが、鍵となるのはバクテリアによる有機物の分解だ。バクテリアが高い分解力を発揮するように水温やpH値などの環境を整える必要があり、これには各社のノウハウが詰まっている。海という自然界の浄化作用を陸上で再現する技術が、ほぼ確立されているのには驚いた。

次に考えなければならないのは、経済合理性を踏まえた魚種と飼育方法の選択だ。養殖がビジネスとして成り立つには、成長速度（出荷サイズに成長するまでの期間）、給餌効率（餌1キロで魚の体重が何キロ増加するか）、歩留まり（病気や死亡での損耗率）、出荷頻度（安定的に出荷できるか）、出荷価格（売上予想）、などさまざまな点を検討し、売上高とコストのバランスを確保する必要がある。

売上高を大きくしようとして魚の数を増やせば、ふんで水質が悪化してかえってコストが増える可能性もある。また、水槽の環境維持に必要な電力が停電で失われた場合の備え（業務継続計画）も必要だ。24時間体制で取り組まなければならない大変な事業だと思った。

一方で、事業に取り組む方々の目が輝いて楽しそうだったのも忘れられない。海から離れた群馬での取り組みだからこそ、未知の発見も多いのだろう。海みたいにキラキラ輝く目の奥にある頼もしいチャレンジ精神が、今年大輪の花を咲かせることを祈っている。

肥後秀明（ひご・ひであき）　1969年生まれ。茨城県出身。東京大経済学部卒。92年に日本銀行入行後、金融機構局考査企画課長兼上席考査役、金融機構局考査運営課長兼上席考査役などを経て2022年4月から現職。